

東海地方に最大の被害を与えた台風～伊勢湾台風～

昭和34年（1959年）9月26日

昭和34年台風第15号（のちに）伊勢湾台風とよばれます）とは、1959年（昭和34年）9月26日に潮岬に上陸し、紀伊半島から東海地方を中心とし、ほぼ全国にわたって大きな被害をもたらした台風です。

そのときの様子を、見てみましょう。

岐阜県内は、26日昼過ぎか大雨が降り出しました。その雨は夜になってもだんだん激しさを増して、横殴りにたたきつけるような豪雨となっていきました。午後7時には養老郡の300ミリを始め各地で記録的な降水量となっていました。

やがて、午後10時になって、台風の中心が岐阜市をおそい、以後12時まで岐阜県内は完全な暴風雨圏内に巻き込まれていました。

各務原でも、暴風のすさまじさに、多くの家屋が倒れたり、木々がなぎ倒されたりして、それが道をふさぐなどしました。

那加第一小学校では、校庭にあった木々は全てなぎ倒されてしまったそうです。

この台風によって、岐阜県では亡くなった人83人、行方不明20人、けがをした人1186人、倒れた家15642戸という大きな被害が出ました。

＜伊勢湾台風を経験した方のお話から＞

当時中学校教師だったAさんは、畳をめくって雨戸の裏側に立て、風をこらえた。南隣にあった2階建ての公民館がメキメキと音を立てる。「パシ、パシ」と電線が切れる音。公民館は崩れ落ち、木材の破片が庭先に飛んできた。「外に逃げていたら、飛び交う瓦に当たって大けがをしたんだろうと思った」と話してくださいました。

どうして、こんなに大きな被害がでたのでしょうか。当時の様子を見てみましょう。

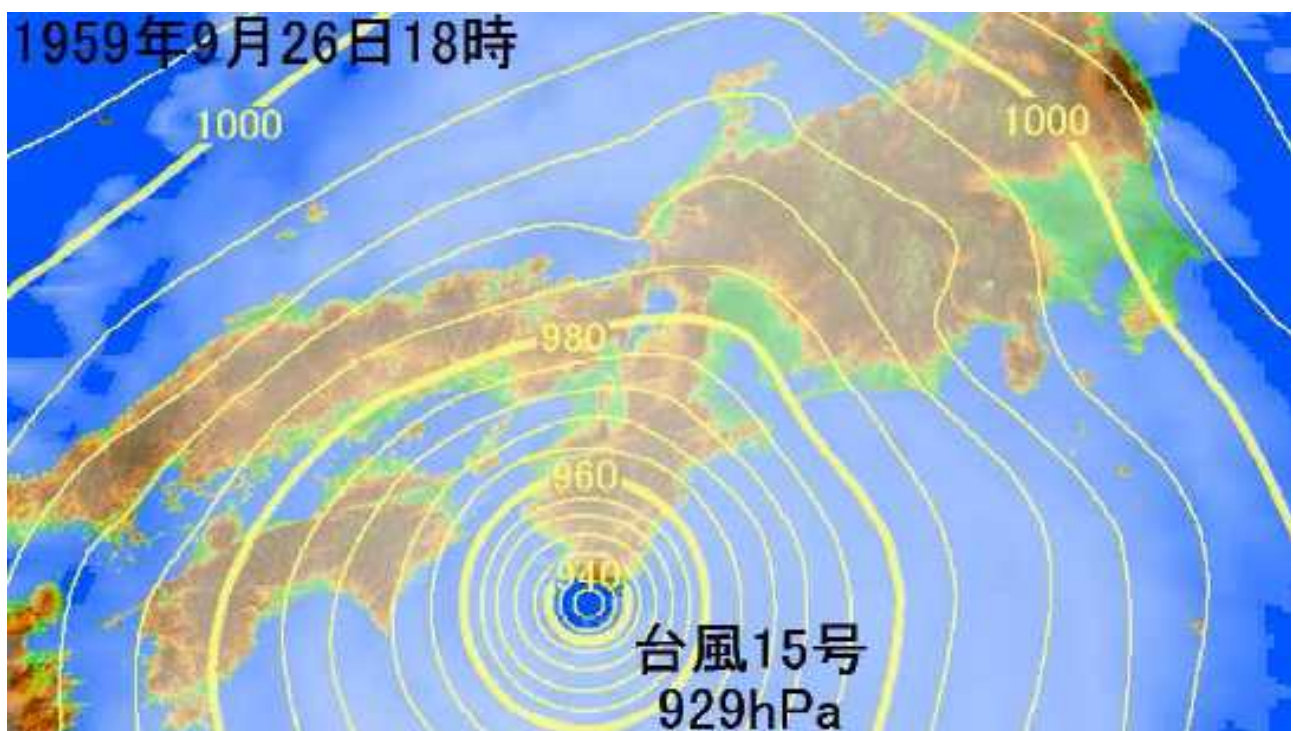
9月22日当初「台風15号」と名付けられたこの台風については、24日朝からすでに警戒のニュースが流されていました。

その後、台風は急速に発達し、25日には紀伊半島南方約1,000kmのところを北西に時速28kmの速度で進んでいました。しかし、上陸前日の新聞が“あす夜、本土接近が”、そして当日の朝刊でさえ“東海、昼すぎ圏内”と平凡な見出しを出す程度でした。ところが、

- 1) 台風が予想以上に大きく発達し勢力が衰えなかったこと
- 2) 高潮の影響が想像をはるかに上回っていたこと
- 3) 停電の真夜中に市街地を襲ったこと
- 4) 高潮と共に貯木場から大量の巨大な材木が市内に流れ込んだこと
- 5) いわゆるゼロメートル地帯を取り囲む堤防が各所で決壊し、その内部に広範な浸水地域を作ってしまったこと

等
の数々の悪条件が重なり、結果的にこの台風15号は伊勢湾周辺地域に大惨事をもたらしました。

9月30日、気象庁は、高潮災害を特徴とするこの惨禍を記憶にとどめるため、この台風を「伊勢湾台風」と命名したのでした。





↑ 台風の後で新聞記者の取材に応じる小学生（鵜沼地区）



↑ 岐阜市の伊自良川の堤防が切れて、水が流れ出している様子

